
しゅんあゆらいふ。

鞠虎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しゅんあゆらいふ。

【Nコード】

N9971X

【作者名】

鞠虎

【あらすじ】

とある女子高生二人の切なくも優しいピュア恋愛ライフ。主人公、歩花は男子の苦手な女の子。一緒のクラスになった背が高くてかっこいい女の子、瞬と付き合うことに。最初は軽い気持ちだったのに、一緒に過ごすしていくうちにお互いが大切な存在になっていく…。

名前

王子様って、別に男の人じゃなくたって良いと思う。
だって私は瞬が好き。

誰がなんと言おうと私の王子様は瞬だけだから。

私、望月歩花、15歳。今日は待ちに待った高校デビューの日。

…待ちに待ったほど楽しみにしてたわけじゃないんだけど。
苦手な男子から距離をおけるのは嬉しい。

…そう、私が入学するのはとあるごく普通の女子高。
なんとなく入ってなんとなく過ごしてなんとなく卒業する。

そんなもんだと思っていた。

多分恋とかもしないんだろっとなあとか。女子高だから出会い少ないし。
…まず男子苦手だし。

このときは私に恋人ができるなんて微塵も1ミリもこれっぽっちも
思ってたなかった。

昇降口に張ってあるクラス分けを眺める。

「…」

望月歩花、発見。

後ろで他の新入生が喜んだり悲しんだりしていた。

「ちょ、一緒だよやったああ！」

「違うクラスだねえ…」

ぎゃあぎゃあ騒ぐ女子高生の声を背にして、私は他のクラスメイトの名前をそれとなく確認する。

私は残念ながら一人だ。出身中でこの女子高に来たのは私一人。まあもともと女子の割合が少ない学校だったし…。

と、ある名前に目がとまる。

「佐渡…瞬」

しゅん…？男の子みたいな名前。

（でもなんかかっこいいな）

どんな子なんだろう。 気になった。

瞬

自分のクラスに向かう。擦れ違う人は知らない子ばかり。少し緊張する。

教室には既にクラスメイトが結構集まっていた。

やっぱりみんなどこかよそよそしさを漂わせ、隣の子に出身中を聞いたりだとか、何で通ってるか聞いたり、メアド交換したり…とそんな感じだ。

私の席は廊下側の後ろの方だった。とりあえず座ると周りの子が数人話かけてくる。

「よろしく〜」

「これからよろしくね〜どこ中？」

そのままたわいのない話をしメアド交換。

わりと私は人付き合いが上手いほうだ。相手が男の人だとまた変わってくるけど。

（なかなか良い高校入ったなあ）

ちなみに結構優秀な人がくる高校だし。頑張ったかいがあった。

新しい友達と話終えた後、ちょっと暇になってしまった。

(窓からの景色でも見ようかな)

窓際に近づいていくと…私のような考えをもったのだろうか、同じく外を眺めているショートヘアの男の、子…？

(や。まさかあ)

大丈夫。ちゃんとスカート履いてる。

なんか気になって、彼女に近よりたくなつた私。私から近寄るのは珍しい。大抵は近寄られる方な私だ。

「ね…」

ねえ。と話かけるつもりだった。

が。

ボスツという音とともに前のめりに。誰かの鞆につまづいたらしい。

「ひゃ」

音に気づいたショートヘアの彼女は振り返ってすぐさま私を支えてくれた。

あやうく入学早々怪我するところだった。それも滑って転ぶっていい。

「大丈夫？」

「う、うん。ありがとう」

ああ、とつても恥ずかしい。

私は彼女を見上げた。

見上げたというのは、なんとというか…

(この子、でかい！)

170はあるんでは。私は152センチ。小さいでしょう。

それもこの子、すごい端正な顔立ち。ショートヘアと長身いうこともあって、美人なんだけど、どこかボーイッシュで美少年って感じ。

「なんかついてる？」

「えっ、ううん？」

ついみとれていた私。

「あの…女の子…ですよね」

冗談で言うのも失礼だったか。彼女は怪訝な顔もせず苦笑して言った。

「ここ、女子高」

「ですよね〜」

頭が馬鹿になつてゐるのだろうか私は。

だって…だってあまりにもかっこいいから。

「でもよく男子と間違われるんだ、うち。名前も男っぽいし」

「名前は？」

「佐渡瞬」

さわたり、しゅん。

さっき気になった名前だ。かっこいいなって思った名前。

「私は望月歩花。えっと、瞬ちゃん…？」

「ちゃんづけしなくていいよ。瞬ちゃんなんて柄じゃないし」

「じゃあ、瞬…？」

「うん、よろしく。歩花」

二人で外を眺める。

綺麗な眺めだ。空が青い。

「君、可愛いよね」

横の瞬から声をかけられる。

「昇降口で後ろから見てた。一生懸命クラス分けの紙を見てる姿」

そ、そんなに私の行動は一生懸命だったのだろうか。

その前に、瞬が私を見ていたというのが気恥ずかしい。

「可愛い」

珍しい言葉でもなんでもない、友達同士でしょっちゅう投げかけ合
う言葉。だけど、瞬に言われたのが嬉しかった。

なんでドキドキしてるんだろう。私。

入学式

入学式。

なんか…ずっとぼうつとしてた。

担任の先生は特に変わったところはない中年のおじさん先生。うーん確か国語科だっけ。忘れた。

髪の毛の薄くなった小さい校長先生。その話もよく覚えていない。

なんでこんなにも入学式に集中してなかったのかというのは、…率直に言えば瞬のせいだ。

(どうしたのかな…私)

どんなにイケメンの子だとしても相手は女の子だ。

どうした。私。

さっきから瞬のことが頭から離れない。

なんで…。

頭の中に「恋」という言葉がちらついた。

あっという間に入学式が終わると生徒達が自分の教室に戻っていく。
私もなんともいえないふわふわとした気持ちで教室に向かった。

「歩花！」

ポンツと急に肩に手を乗せられ、私は必要以上の驚きの声を上げてしまった。

「ふえっ!!?!?!?!」

周りを歩いていたら子達が一斉にこちらを見る。かわいい〜とかいう声が聞こえた。

恥ずかしい!

「あ…ごめんね歩花。でも驚きすぎ」

瞬だ。頬が熱くなるのを感じた。

「…だつてえ…」

瞬は顔を俯かせる私を見てふつと笑う。

「あゝもうホントに可愛いな歩花は」

頭をわしゃわしゃ撫でられた。

動機が激しくなる私。教室まで無事辿りつけるのかな…。

「もう…恥ずかしいよ子供みたいでしょ私…」

「ん？若くみられるんならいいじゃん？」

そういう意味じゃないよ、瞬…。

始まる

ふう。

どうにか心を落ちつかせて教室についた。

「じゃ、また後で」

「うん」

瞬は自分の席に戻っていく。結構私と離れてる。名前に当たり前か。

私も自分の席に戻ると、さっきメアド交換した子達がやってきた。

「ねえ、佐渡瞬ちゃんと同じ中学校だったの？」

「めっちゃ仲良くない？」

「…え、全然違うよ」

「そうなの〜？」

「あの子かっこいい〜イケメンって感じ」

やっぱり誰から見てもそうなんだ。

「ちょっとアンタ周りに男子いないからって手だすんじゃないよ〜」
「？」

「何言ってるの私は男狙いですう彼氏作るんですう」

「ちよっごめんね〜この子男に飢えてるから気にしないであげてね〜」

「うん、うん」

(彼氏、か…)

先生がガラスと前の扉を開けて入ってきた。

今まで喋っていた生徒達が一気に静かになる。

「えー、ではね、簡単にこれからのこととかを話ましようかね。そしたら自己紹介なんかをね、やりましようかね」

先生の話が始まる。

いきなり受験の話をしてうんざりする。

自己紹介が始まる。

自然と瞬の自己紹介に耳を傾ける。

自分は当たり前障りのない自己紹介をする。

始まる。

私達の高校生活が始まる。

登校

眠い目を擦りながらの翌日の登校。

私はバスも自転車も使わない。徒歩だ。だから目をしょぼしょぼさせながら歩いてるとよく歩行者にぶつかりそうになる。ホントに眠いんだもの。

周りを自転車登校の生徒や足早な生徒が通り過ぎていく。

（私も高校生なんだなあ）

実感。

少し背伸びしたような、大人になったような、そんな気分になる。

「えー！？彼氏いたの？？なんで言ってくれないの裏切り者お」

「ええ言わなかった？？」

周りを歩く生徒の会話が聞こえた。

（彼氏ね…）

いたらいいよね。

私は男が最初から嫌だったわけじゃない。

中学のときはちゃんと思いを寄せる男の子はいたし、告白とかも何
度かされたことがある。

でも、

ある出来事がきっかけで男が怖いと思うようになってしまった。

(思い出したくない。やめよ)

頭の中の余計な邪念を吹き払うように私は走った。

そして、転んだ。

またかよ！

もう、自分でツッコミをいれなくなるドジぶりだ。

(えー…何もなくて転ぶって…)

恥ずかしいを通り越して飽きれに近い気持ちを抱きながらスカート
についた砂埃を払う。
周りを確認すると、

「大丈夫？」

「瞬！いつのまに」

見られたんだ…。シヨック。

「ちょうど今チャリできて、歩花発見！って思った瞬間的に急に走り出して急にこけたんだよ」

笑いを堪えながら言う瞬。

「笑わないでよー」

「あーごめんごめん。可愛いからいいよ。でも昨日みたいに支えられなかったね。もちっと早かったらなあ」

また、可愛いとか言う。

二人で並んで学校へと歩みを進める。瞬は乗っていた自転車を降りて。

隣にスラッとして歩いてる瞬はやっぱりかっこいいと思った。自然と見つめてしまう。

「ん？どした歩花」

「うっん」

こんな彼氏がいれば。

……
彼氏？

放課後

…気がつけば瞬のを見ていた。授業中も、ちょっと先生の話に飽きると自然と瞬の後ろ姿を見てしまう。

欠伸をしてたり、頬杖をついていたり、窓の外を見つめていたり。

（私、気持ちわるい女じゃん）

クラスメイトの友達を見ては少し恥ずかしく思いながらもドキドキする。

それがまだ異性だったら分かる。

相手は、女の子。

（なんなの…これじゃまるで）

恋みたいじゃない。

先生が部活動体験期間について何か言っていた気がする。知らない。私には部活をする気がないし。

あつという間に一日は過ぎた。こんなふうに三年間もあつという間
なんだろうな。

放課後、他の皆がそれぞれ自分にあつた部活を探しに出ていく。

部活に入らないつもり生徒は教室にいるか、それとも帰るかだ。
周りの子に部活体験に誘われたけど断ってしまった。

今日は教室には私以外誰もいない。まさか私だけではないよね。

放課後の、閑散とした教室。外はまだ明るいほうだ。
そこに私は突っ立っていた。

(なんか、私傍から見たら悲しい人みたいじゃん…)

帰るか…。

そのとき、

教室に入ってきた人影。

瞬だった。

「お、歩花じゃん。どうしたの、誰もいない教室で。傍から見たら
悲しい人だよ」

やっぱりそう思われるのね。

「歩花、もう帰るの?」

「うんまあ、部活入んないし」

瞬はタツと近づいてきた。「ちょっとお喋りしようよ」「お喋り?」「瞬はにっ」と笑う。

「えっ、瞬は部活いいの?」「ウチはもう決まってるんだよね、まだ明日もあるし」

それに、と瞬は付け足した。

「歩花と話したい」

「…」

胸が熱くなるのを感じた。「用事ある?」

「いや、…ない、よ」

ドキドキがとまらない。

これ、悟られたら気持ち悪いって思われるかな。

瞬は私の前の席に座った。私もカタン、と小さい音をたてて自分の席に座った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9971x/>

しゅんあゆらいふ。

2011年11月21日23時48分発行